

第9室

(5) 9:30 ~ 10:00 (6) 10:10 ~ 10:40
(7) 10:50 ~ 11:20 (8) 11:30 ~ 12:00

第9室 (5)

小学校外国語において「学びに向かう力・人間性等」を涵養するには — 逆向き設計と振り返りの質を高める働きかけ —

永倉 由里 (常葉大学) ・ 木村 千鶴子 (静岡市立宮竹小学校)

本発表は、現行の学習指導要領の大きな特徴である「学びに向かう力・人間性等」をいかに養うかに取り組んだ小学校6年生を対象とした授業実践報告である。現行の学習指導要領には、3つの柱があるが、「知識・技能」はイメージしやすく、これまでの経験を活かした指導がなされている。さらに「見方・考え方を働かせる」ことが求められ、「思考力・判断力・表現力」についてもパフォーマンス評価等を取り入れ、妥当でありかつ実行可能な評価の在り方が浸透してきている。しかし、評価の対象にもなっている「学びに向かう力」は、具体的な涵養方法が共有されているとは言い難く、教師にとっても果たす役割として強く求められてはこなかった。

教員なら誰も一人ひとりに寄り添い、各自の人間性を尊重したいと感じているであろう。しかし、授業実践において、具体的に何をなすべきかを見定めることは極めて難しい。

当日は、目標とするゴール活動に向け逆向きに設計された授業において、教師のファシリテートによって、いかに児童の自己理解が促され、学習方略への意識が養われたのかを報告する。メンター（助言者）と実践者（教師）との交流と、授業改善の概要ならびに振り返りシートへの記述と質問紙調査の結果から窺える児童の変容ぶり、さらに実践者の指導観の変化について言及する。

第9室 (6)

SNS X

小学校教員がチーム内で感じる心理的安全性の大切さ： 英語の指導力についての意識と心理的安全性との関連

田村 岳充 (宇都宮大学教職大学院)

2020年度より小学校において外国語（以下、英語）が教科化され、文部科学省は小学校への専科教員の配置促進に取り組んでいるが、その数が足りているとは未だ言えない現状がある。そのため、英語専科ではない多くの学級担任が引き続き英語の授業の中心を担うとともに、2017年告示の小学校学習指導要領が示す3観点による「評価」にも対応しなければならない状況に置かれている。こうした状況のもと、小学校教員の英語への不安はより大きなものとなっている。教員一人一人の努力に頼っての授業改善には自ずと限界があり、学年や学年ブロック（いわゆる高学年など）のようなチーム内での協働が、個々の教員の不安を和らげ、結果として授業改善へ

とつながっていくのではないだろうか。

チームが機能し、メンバーが前向きに活動できるようにするには、日頃から気付いたことや疑問に思ったことなどについて、誰もが率直に発信できる「心理的に安全な環境」がチーム内に必要である（所属する個々人が「心理的安全性」を感じることができる環境）。心理的安全性とは、「職場で意見を提示したり、質問したり、助けを求めたりしても、『自分自身のイメージやキャリア・地位にはダメージが及ばない』という個人の感情やチームの信念」を指し、組織研究において人々が効果的に協力するための重要な要因であることが確認されている（Edmondson, 1999:2004）。

本研究では、A 県の小学校英語スキルアップ研修会の受講者（およそ300名）を対象に、自身の「英語の指導力などについての意識」と、勤務校で所属する学年（ブロック）「メンバーとの協働についての意識」に関する Web アンケート調査への協力を求め、回答結果から双方の関連について探索していく。受講者の感じている心理的安全性の有り様が、英語の指導力などへの意識にどのような影響を及ぼしているかを捉えていく。

第9室 (7)

SNS X

児童の英単語認識に影響を及ぼす要因に関する研究

巽 徹（岐阜大学）・溝口 貴大（岐阜県中津川市立西小学校）

波多野 恵（岐阜県美濃加茂市立古井小学校）

本研究は、小学校4～6年生の英単語認識に影響を与える要因を明らかにしようとするものである。岐阜・愛知県内の公立小学校7校（児童1,968名）の協力を得て「英語クイズ」を実施した。クイズでは、中村（2003）の多角的語彙習得モデルを参考に、英単語の認識における「音声」と「意味」、「音声」と「文字」、「文字」と「意味」それぞれのつながりを問う設問を作成した。

「音声」と「意味」のつながりでは、動物の名前など児童にとって身近な語彙については、概ね8割以上の児童が正答できており、4～6年生で差が見られなかった。一方で、「教科名」については、4年生と5・6年生の正答率に差が見られ、児童に認識されやすい語とそうでない語が存在することが分かった。

「音声」と「文字」のつながりでは、カタカナ語として日常用いられている語ではどの学年でも9割以上の正答率となっている一方で、教室の名称を表す語では、4年生と5・6年生の正答率の差が見られた。

「文字」と「意味」のつながりでは、カタカナ語として日常用いられている語では、どの学年でも8割程度以上の正答率となった。一方で、英語で表記した「月の名前、曜日の名前」が混在したリストを見て（4つの選択肢のうち一つだけが曜日）仲間外れを選ぶ問題では、「単語の意味」に注目して解答しようとする児童と、単語の長さや文字の太さの違い、共通の文字の有無など、「単語の見た目や形」に注目して判断する児童とが存在することが分かった。判断する注目点の違いは、児童の学校内外における「総英語学習時間」がその一因であることが明らかになった。また、学校外で英語学習を行っていない児童に注目すると、月と曜日名前の見分けができた児童は4年生で3割程度、5年生で4割程度、6年生でも6割に満たないことから、月や曜日の名前については中学校入学段階でも識別が難しい生徒がかなりの割合存在することが明らかになった。

小学校英語における児童の発音練習に有効な教材・教具の開発

常名 剛司（静岡大学教育学部附属浜松小学校）・和田 将延（静岡大学教育学部附属浜松小学校）
巨理 陽一（中京大学）

現行の学習指導要領では、音声の学習に関する事柄について現代の標準的な発音、音の変化、強勢（アクセント）、イントネーション、文の区切り等について、音声に十分に慣れ親しませることにより、その特徴を気づかせることが求められている。本研究では、国立大学附属小学校の英語の授業において、児童が英語の音声に十分に慣れたり、発音の技能を向上させたりするために開発された発音練習機（mimi'x）のための発音練習用ワークシートを開発・実践した。実践の振り返りに基づいて、mimi'x や発音練習用ワークシートを作成する上での留意点や、児童から得られた感想を報告する。

言語学習支援教材 mimi'x（鈴木楽器製作所）は、自分が発話した英語の発音を意識的に聞くことによって、英語の音声的特徴と自らの発音の異同を捉えやすくなる点に特徴がある。一方で、この mimi'x を授業の中で活用してより効果的に児童の英語の発音を向上させるには、何をどのように練習したらいいのかを焦点化し、やりっぱなしにしないための教材が必要と考えた。本実践では、児童が使用している教科書に準拠した発音練習用ワークシートを開発し、mimi'x と発音練習用ワークシートを併用した実践を行った。

mimi'x を使用した授業後に、児童に対してインタビュー調査を行うと、自分が発話した英語の発音を自覚的に聞くことができ、英語の細かな音声を意識できるようになったという回答が複数得られた。発音技能に対する効果の検証に向けて、授業者の振り返りから授業での継続的な活用を志向した教材作成の留意点や、mimi'x とワークシートの併用の手応えや課題をまとめた。